

各位

全3ページ

登録速報(2018-185)

2018年 8月 8日

クミアイ化学工業株式会社

企画普及部普及課

登録速報

下記の通り適用拡大登録となりましたので、ご連絡します。

適用拡大登録年月日：2018年 8月 8日

記

1. 農薬の登録番号及び名称

登録番号 第 20889 号

名称 ベンレート水和剤 (住友化学(株)登録)

2. 適用病害虫の範囲又は使用方法の変更の内容

農薬登録申請書第7項「適用病害虫の範囲及び使用方法」を以下のとおり変更し、別紙のとおりとする。

- ・作物名「たまねぎ」の希釈倍数または使用量「2000倍」に適用病害虫名「黒かび病」を追加する。
- ・作物名「ピーマン」に適用病害虫名「斑点病」および「炭疽病」を追加する。
- ・作物名「いちご」のベノミルを含む農薬の総使用回数「4回以内（種子粉衣は1回以内、は種後は3回以内（苗根部浸漬は1回以内、本圃定植後は1回以内）」を「9回以内（種子粉衣は1回以内、苗根部浸漬は1回以内、育苗期の灌注は3回以内、本圃定植後の灌注は1回以内、散布は3回以内）」に変更する。
- ・作物名「やまのいも」を追加する。
- ・作物名「カリフラワー」を追加する。
- ・作物名「トルコギキョウ」を追加する。

3. 当該変更に伴い、農薬登録申請書の記載事項に変更を生ずるときは、その旨及び内容

農薬登録申請書第8項「使用上の注意事項」の記載内容に(15)を追加し、現行(15)以降を順次繰り下げ、別紙のとおりとする。

【追加事項】

- (15) 水耕栽培でトルコギキョウを栽培する場合には、廃液は環境中に流出しないように適切に処理すること。

別紙

【変更部分】

作物名	適用病害虫名	希釈倍数 または 使用量	使用液量	使用時期	本剤 の 使用 回数	使用方法	ペニル を含む 農薬の 総使用回数
<u>たまねぎ</u>	乾腐病	50倍	セル成型育苗 トレイ1箱または ペーパーポット1冊 (30×60cm、 使用土壌約5L) 当り500mL~1L	定植前	1回	灌注	8回以内 (種子粉衣は 1回以内、 育苗培土混和、 灌注または 苗根部浸漬は 合計1回以内、 散布は 6回以内)
		100倍	セル成型育苗 トレイ1箱または ペーパーポット1冊 (30×60cm、 使用土壌約5L) 当り500mL				
		1g/1kg 培土	—	は種前		育苗培土 混和	
		20倍	—	移植直前		3分間 苗根部浸漬	
	灰色腐敗病 灰色かび病 <u>黒かび病</u>	2000~ 3000倍 <u>2000倍</u>	100~300L/10a	収穫前日 まで	6回 以内	散布	
<u>ピーマン</u>	うどんこ病 <u>斑点病</u> <u>炭疽病</u>	2000~ 3000倍	100~300L/10a	収穫前日 まで	3回 以内	散布	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は 3回以内)
<u>いちご</u>	炭疽病	500倍	—	仮植前	1回	10~30分間 苗根部浸漬	<u>9回以内</u> (<u>種子粉衣は</u> <u>1回以内</u> 、 <u>苗根部浸漬は</u> <u>1回以内</u> 、 <u>育苗期の灌注は</u> <u>3回以内</u> 、 <u>本圃定植後の灌注</u> <u>は1回以内</u> 、 <u>散布は3回以内</u>)
	萎黄病					1~3時間 苗根部浸漬	
	炭疽病 萎黄病			50~100mL/株	育苗期	3回 以内	
100mL/株	本圃定植後 但し、 収穫30日前 まで	1回					
<u>やまのいも</u>	葉渋病	2000倍	100~300L/10a	収穫前日 まで	3回 以内	散布	
<u>カリフラワー</u>	菌核病	2000倍	100~300L/10a	収穫7日前 まで	3回 以内	散布	4回以内 (種子粉衣は 1回以内、 は種後は3回以内)
<u>トルコギキョウ</u>	立枯病 (フザリウム菌)	1000倍	セル成型育苗トレイ 1箱または ペーパーポット1冊 (30×60cm、 使用土壌約4~5L) 当り500mL	定植前日	1回	灌注	1回

【変更後】

8. 使用上の注意事項

- (1) 使用量に合わせ薬液を調製し、使いきること。
- (2) 水稻の種子消毒の場合は下記の注意を守ること。
 - 1) 消毒前に塩水選を行なうこと。
 - 2) 消毒後は水洗いせずに浸種又は播種すること
 - 3) 薬液の温度は10℃以下をさけること。
 - 4) 粉衣処理では付着をよくするために予め種子を湿らせ（塩水選水切り後などが適当）湿粉衣すること。
 - 5) 浸種後処理は種子が鳩胸の時期になるまでに行なうこと。
 - 6) 本剤処理を行なった種子の浸種に当っては次の注意を守ること。
 - ①処理後、種籾を十分風乾してから行なうこと。
 - ②浸種は停滞水中で行なうこと。
 - ③種籾と水の容量比は1：2とし、水の交換は行なわないこと。ただし、水温が高く種籾が酸素不足になるおそれがある時は静かに換水すること。
- (3) いもち病に対する本剤の育苗箱灌注処理は、本田で発生するいもち病に対しては効果が期待できないので注意すること。
- (4) きゅうり、トマトに対して灌注処理する場合は、誤って高濃度で処理すると、退色や生育抑制等の薬害を生じることがあるので、所定濃度を守ること。
- (5) たまねぎ、いちごに対して苗根部浸漬処理する場合は、誤って高濃度で処理すると、いちごでは活着不良、たまねぎでは、初期生育遅延等の薬害のおそれがあるので、使用方法を厳守すること。
- (6) いちごの萎黄病防除に使用する場合、特に多発地では植付前の土壌くん蒸と本剤処理とを組み合わせるとより有効である。
- (7) こんにゃくの乾腐病防除に使用する場合は、種芋の芽基部を上に向けて並べ、散布液が芽基部に充分かかるように1㎡当り100mL散布すること。
- (8) 麦類の雪腐病防除に使用する場合は、散布は根雪近くに行うこと。
- (9) なすの半身萎凋病に対して灌注処理する場合は、定植前及び定植時処理では葉の黄化、生育抑制等の薬害を生じるおそれがあるので定植後に処理すること。
- (10) りんごのモニリア病に使用する場合は、多発条件下では効果が劣ることがあるので、発病初期に時期を失しないように散布すること。
- (11) なしの枝枯病、胴枯病に使用する場合は、マシン油乳剤で希釈し、病斑部及びその周辺に1～2回塗布すること。尚、病斑部を削り取った後塗布する場合は木質部が見えない程度に表皮を薄く削ること。
- (12) 桑の胴枯病に使用する場合は散布適期は9月上・中旬である。
- (13) ハウスなどの常温煙霧用として使用する場合は下記の注意事項を守ること。
 - 1) 煙霧用として使用する場合は専用の常温煙霧機により所定の方法で煙霧すること。
特に常温煙霧装置の設定及び使用にあたっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
 - 2) 作業はできるだけ夕刻行ない、作業終了後6時間以上密閉すること。
- (14) たばこ腰折病に対し親床で使用する場合は薬害を生じるおそれがあるので、希釈倍数は2000倍とし、散布量は1㎡当り1～2Lとすること。また、発芽期には使用しないこと。
- (15) 水耕栽培でトルコギキョウを栽培する場合には、廃液は環境中に流出しないように適切に処理すること。
- (16) 本剤及び同系統の薬剤の連続使用によって薬剤耐性菌が出現し、効果の劣った例があるので過度の連用をさけ、なるべく作用性の異なる薬剤を組み合わせ使用すること。
- (17) 本剤はエトフェプロックス乳剤またはダイアジノン乳剤と混用した場合、凝固物を生成するため混用をさける。
- (18) 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤を初めて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬害の有無を十分確認してから使用すること。なお、普及指導センター、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

以上